

溶融核燃料か堆積物撮影

福島第一 2号機の原子炉直下

東京電力は三十日、福島第一原発2号機の原子炉格納容器内のカメラ調査を実施、原子炉直下にある格子状の作業用足場の上に黒っぽい堆積物があるのを撮影し、画像を公開した。第一

六年となるが、デブリの実態はこれまで全く不明で、確認できれば、廃炉作業で重要な燃料取り出しに必要な技術開発につなげたいと考えた。

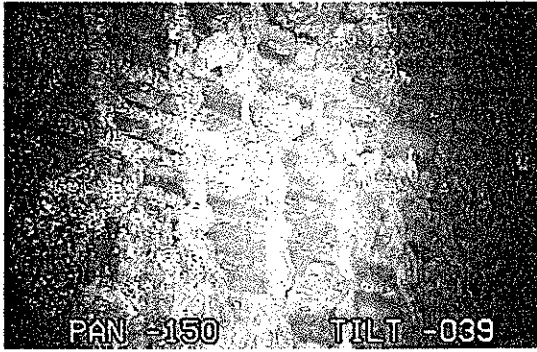
たが公開画像では、格納容器内は本来の姿から大きく変わっており、メルトダウン（炉心溶融）を起した事故のすさまじさとデ

ブリ取り出しの難しさを突き付けた調査結果だ。東電福島本社の石崎芳行代表は記者会見で「溶けた核燃料が写っているとすれ

ば、今後の廃炉作業の中で大きな一歩。取り出し作業をどう進めたらよいかという大きなヒントが得られるのではないかと話した。2号機の格納容器内の放射線量は二〇一二年三月の調査時に毎時七三マイクロシーベルトと死亡するレベルだった。今回の調査は、カメラ付きパイプ（長さ約一〇・五メートル）を格納容

器の壁の貫通部分から挿し込み実施。パイプに線量計はなく、格納容器の外側に設けた壁の後ろで作業した。画像では、圧力容器裏下にある鉄製の作業用足場「グレーチング」の広範囲に、黒っぽい堆積物がこびりついている様子が確認された。一部の堆積物は数センチもって塊のようになつたり、格子状部分が詰まつたりしている場所もあった。

足場は一部の形がゆがんだり、設置場所からなくなつたりしていた。事故時の高温の影響で破損した可能性もある。圧力容器下部にある制御棒を動かす装置やケーブル類も写っていた。東電はこの日、数時間分の映像を撮影。約二分半に編集して公開した。



福島第一原発2号機の原子炉直下で確認された核燃料とみられる堆積物。鉄製の作業用足場（こびりついている）30日（東京電力提供）



原子炉内の核燃料 ウラン粉末を焼き固めた円柱形の「ペレット」（直径約1センチ、長さ約1センチ）を「燃料棒」（直径約1センチ、長さ約4センチ）に詰めて、ジルコニウム合金製の箱に入れて束ねたものを「燃料集合体」と呼ぶ。燃料は核分裂が止まっても高温を出し続けるため、炉心の冷却機能が失われた場合、溶けて形状を維持できなくなり、原子炉下部に落ちる「メルトダウン」につながる。